

〔研究ノート〕

スピリチュアルに生きる人々(8)

伊田 広行

目次

ル＝グウィン、サン＝テグジュペリ、
 自らを振り返る人：釜が崎にネパールを見た入佐明美さん
 沁みってくる歌（サンボマスター 他）
 タイマグラばあちゃん
 人の人へのかかわり方・再考：スクウェアとヒップ

☆ ☆ ☆

前号に引き続き、私の提唱する〈スピリチュアル・シングル主義〉的な生き方や思想や行動に近いと思えるイメージと具体例を紹介していく。

ル＝グウィン

ル＝グウィン（1929— ）は、東洋思想（特に道教）と西洋思想の統合を追求しており、またユング心理学、フェミニズム、先住アメリカ民族文化などの影響を受けているといわれている、女性のSF／ファンタジー作家である。〈スピ・シン主義〉は彼女から学んだ多くのことをベースにしたものであるが¹⁾、ここでは、彼女が、「アメリカ人はなぜ竜（ファンタジー）が恐いのか」という問いを考察したエッセイをとりあげてみたい。

30歳過ぎの男たちは、ファンタジー（的なもの）は、暇なときの楽しみ、娯楽であり、女・子どものものであり、2次的で、付け足しで、自己陶醉や逃避でしかないと思っている。ピューリタンの勤労精神＝功利的なこと、ビジネスマンの価値（即座に有形の利益をもたらすものしか意味はない）、旧来の男性・女性観（ジェンダー）などが、「そんなものが何の役に立つのか」とファンタジーを駄目と決め付けさせている。こう決め付けるのは、男であり、エリート女性である。日本の政治、経済、学問でも同じように、認識されている。読むのはベストセラーで、それは売れているからよいらしい。自分も成功の秘密にあ

1) 私が明確に〈スピリチュアル・シングル主義〉と銘打ってまとめた最初のものが、拙稿「スピリチュアル・シングル——生き方と社会運動の新しい原理を求めて—— ①～③」『大阪経大論集』50巻第1－3号、1999年、である。その最大の契機がル＝グウィンの諸著作を一気に読んだことにある。

やかりたいというのだ。例えば日本で言うならば、「勝ち組」系、中谷彰宏氏や「超……法」を書いている学者、秋元康氏、占いや「精神世界・スピリチュアル」系の人たち（細木数子や江原啓之氏）など、年間に何冊も本を出したりテレビでの売れっ子といわれる人たちの浅はかさを、なぞりたいというのである。人間は自分の精神的背丈（スピリチュアル度）を越えられないものである。

だが、ル＝グウィンが求め、価値を認めるものは、イマジネーション、すなわち知的感覚的な精神の自由であり、目先の実益に執着しない自発的な行為であり、「プレイ」（再創造、リクリエーション）すなわち既成のものを組み合わせて新たなものを作ることである。私たちには、イマジネーションの鍛練がいる。真の鍛練は、抑圧と懲罰でなく、押さえつけることの逆、つまりそれを熟達させること、その成長を促し、活動・結実を促すことにある。イマジネーションの力を正しく鍛えないと、現実を自己満足的に解釈するようになってしまう。男（女）たちの見るポルノ、三文ウエスタン、スポーツ、逃避的読み物（気楽に読める内容のない読み物）、どうでもいい情報（その最たるものが非リアルの権化、株式日報）などは不毛、救いがたく不毛である。なぜならそれは、リアリティがなく、イマジネーションがないからである。

では、なぜファンタジーは必要なのか。それはまず第一に、悦びと楽しみを与えてくれるからであり、第二に、イマジネーション豊かなフィクションは、私たちの感情や宿命や社会に対する理解——世界観——を深めてくれるからである。ファンタジーは「事実」ではなく、偽りや真実をあぶりだす。それは自由とは何かを教える。

逆に言えば、悦びや楽しみがなくてもいいと思っている人、車や昇給、収入、物質的成功、社会的地位しか望まない人には、「世界観」は、したがってファンタジーは必要ないといえる。億万長者はホビットを読まない。億万長者はやつれた顔をし、子ども時代をなくした顔をしている。

「成熟」とは子どもが死んで大人になることでなく、子どもが生き延びて大人になることであるとル＝グウィンは考える。イマジネーションの効用は、すぐれた大人になる能力を伸ばすことにある。日常と狂気の狭間に位置するものに触れる豊かさを知ることの素晴らしさを彼女は自覚する。大人の能力は子どもに内在するのであり、子どものそれを伸ばすことが大人の楽しい義務であるとする。したがって、それを女／子どものものと嘲笑うのは愚かなことであると。結論は明確である。大人たちは竜（ファンタジー）が怖い。なぜなら自由が怖いから²⁾。

サン＝テグジュペリ

作家でありまた職業飛行家であったサン＝テグジュペリ（1900－1944）は、大自然に触れ、人間の真実を、人道的大義のために自己を滅却すること（その時の死は責任の観念に深く根差したものであること）のなかにみた。アンデス山中の吹雪の中を生き抜いた友人

2) ル＝グウィン [1992]『夜の言葉』岩波書店、83-90ページ。

ギヨメの勇氣、生へのエネルギーに、価値の根本をみた。大空を駆け巡り、砂漠に一人たたずむ中で、つまらない世間ごとにひっかかって、本当のこのよさや想像力や「ひとつのバラのなかにあるもの」に無頓着な人間（大人）たちの功利主義的情けなさを嘆いた。それを本にしたのが、『星の王子さま』であり『人間の土地』であった。そこでのスピリチュアルな言葉をいくつか引用しておく。

『人間の土地』より

「ある一つの職業の偉大さは、もしかすると、まず第一に、それが人と人を親和させる点にあるかもしれない。真の贅沢というものはただひとつしかない。それは人間関係の贅沢だ。物質上の財宝だけを追うて働くことは、われとわが牢獄を築くことになる。人はそこへ孤独の自分を閉じ込める結果になる。……あの飛行の夜と、その千万の星々、あの清潔な気持ち、あのしばしの絶対力は、いずれも金では買えない」

（ギヨメの言葉）「ぼくは断言する、ぼくがしたことは、どんな動物も為し得なかつたはずだと」

「彼（ギヨメ）の偉大さは、自分に責任を感じるところにある。……僕は死を軽んずることをたいしたことだとはおもわない。その死がもし、自ら引き受けた責任の観念に深く根差していない限り、それは単に貧弱さの表われ、若気のいたりにしかすぎない」

「国家を建設しつつある移民にとって、生命の意義は征服にある。つまり兵士が農耕を軽蔑するのだ。しかしこの征服の目的も、終局はこの移民がその地に落ち着くことではないだろうか？ こうして進歩の熱に浮かされて僕らは多くの人を鉄道の敷設や、工場の建設や、油井のくっさくに従事させた。その間僕らは、これらの施設を行うのも、結局は人間のためにするのだという事実をいささか忘れがちだった。征服が続けられたあいだじゅう、僕らのモラルは軍人のモラルだった」

「人間にあっては全てが矛盾だと、人はよく知っている。ある一人に、彼がおもうがまま創作に力を注ぎうるようにと、食う心配をなくしてやると、彼は眠ってしまう。勝利の征服者は、やがて軟弱化する。気前のよい男に金を持たせると守銭奴になってしまう。……僕らを豊富にしてくれる未知の条件があるということ以外、何が、僕らにわかっているだろうか？」

「他のある人たちは、先駆者の喜びも、宗教者の喜びも、学者としての喜びも、すべて禁じられたあらゆる職業の歯車に巻き込まれている。人は信じたものだった、彼らを偉大ならしむるには、ただ彼らに服を着せ、食を与え、彼らの欲求の全てを満足させるだけで足りると。こうして人は、いつとなしに、彼らのうちに、クリトリーヌふうな小市民を、村の政治家を、内生活のゼロな技術者を、作ってしまった。人は彼らに教育は与えるが、修養は与えない。教養の意味を、もっぱら公式を鵜呑みにすることだと信じるような厄介な意見が行われることになる。技術学校の劣等生でも、自然やそこに行われる法則についてなら、デカルトやパスカル以上のことを知っている。だがはたして、彼に、あの二人と同じほどの精神力があるだろうか？」

「(戦争の)勝利は最後に腐る方の側にある。しかも双方とも、たいていは同時に腐ってしまうのだ。……戦争は僕らを欺く。憎悪は、競争の昂揚に、何ものをも加えはしない。何故憎みあうのか？ 僕らは同じ地球によって運ばれる連帯責任者だ、同じ船の乗組員だ。新しい総合を生み出すために、各種の文化が対立することはいいことかもしれないが、これがお互いに憎みあうにいたっては言語道断だ」

「飢え、僕らが、感ずるところのもの、スペインの兵隊を砲火を冒してまで、植物学の講義に導くあの飢え、メルモスを西大西洋調査にと追いやり、また別の一人を彼の詩に追いやりつつあるあの心の飢えは、この伝授の系統がまだ終わっていない、僕らが僕ら自身と世界を認識しなおす必要のあることの証拠だ。僕らは、夜の中へ、タラップを放つ必要があるのだ。ただ、自分たちの知能を、利己的な存在だと信じ、自他の区別をしている人たちだけが、この飢えを知らずにいるが、実にあらゆる事物がこの種の知能を否認する！ 僚友諸君、わが僚友諸君、僕は君たちを証人に立てる、これまでに、どのような場合に、僕らが幸福であったかを思い出して！……眠りっぱなしにされている人間が、あまりに多くありすぎる」

「精神の風が、粘土の上を吹いてこそ、はじめて人間は創られる」³⁾

『星の王子さま』より

「どうやらものわかりのよさそうな人にでくわすと、ぼくはいつも手元にもっている第1号の絵を、その人に見せました。本当にものわかる人かどうか、知りたかったのです。ところが、その人の返事はいつも〈そいつあ、ほうしだ〉でした。そこでぼくは、ウワバミの話も、原始林の話も、星の話もやめにして、その人のわかりそうなことに話をかえました。つまり、ブリッジ遊びや、ゴルフや、政治や、ネクタイの話をしたのです。するとそのおとなは、〈こいつあ、ものわかりのよい人間だ〉と行って、たいそう満足するのでした」

(砂漠に星がひとつだけの絵にたいして)「これが、ぼくにとっては、この世で一番美しくって、一番悲しい景色です。……もし、このところを、お通りになるようでしたら、お願いですから、お急ぎにならないでください」⁴⁾

自らを振り返る人：釜が崎にネパールを見た入佐明美さん

入佐明美さん(現在、大阪建設労働者生活相談室、ボランティア相談員^{ケースワーカー})の話聞き、本を読んだ。感動した。というより、改めて、〈スピ・シン主義〉的にちゃんと生きていなくては、と自分の原点、進むべき方向を強く再確認する契機となった。背筋が伸びた。すばらしい、ホンモノの人だった。新聞でこの人の活動とお名前は見たことがあった。本も買っていた。でも読まずにそのままにしていた。ようやくお話を聞く機会をもてて、彼

3) サン＝テグジュペリ [1955]『人間の土地』(新潮文庫) 36-7, 41, 50-1, 53-4, 177-8, 195, 196, 200-1, 205ページ。

4) サン＝テグジュペリ [1953]『星の王子さま』(岩波書店) 10, 155ページ。

女に出会えてよかったと思えた。彼女の実践に遠く及ばないが、近づく努力を続けねばと思えた。彼女のお話と本の内容の一部を紹介するが、ぜひ本を直接読んでいただけたらと思う⁵⁾。

1955年生まれの入佐さんは、中学2年(1968年)のとき、「何のために生きているのだろう?」と疑問がわいてきて、生きる意味がつかめなくて悶々として悩み始めたという。ただ食べて寝るだけの繰り返しでいいのかと空しくなったと。人のために何かして、充実してすごしたいと思った。そのとき、当時ネパールで医療活動(栄養失調や結核で苦しんでいる人とともに暮らしながらの治療)をしている日本人医師(岩村昇さん)を道徳の教科書で知って、彼のように苦しんでいる人を助ける仕事をしたいと思い、そんな生活ができたらどんなにいいだろうかと夢を持った。そしてその夢を持ち続け、それを目指してがんばって看護師の資格を取った。くじけそうになったときにも夢を思い出しなんとかがんばったという。2年9ヶ月看護師として働いた後、23歳のとき憧れの岩村先生に会ってネパールにいきたいという、了解を得ることができとても嬉しかった。これで長年の夢がかなうと。

しかし、その前に2-3年、日本であなたを必要としているところがあるのでそこで働いてからネパールにいきましょうという話をされ、彼女は迷った。そのとき提示されたのが、大阪の釜が崎でのケースワーカーだったからだ。そこは日雇いなどの「労働者」約3万人が密集して住んでいるところであり、私(入佐)のようなものがそこで何ができるのか自信がなかったという。実際に見に行っても自信は崩れる一方であったし、相談した人もみな反対するようなどころだった。最初は歩くだけでも緊張して足が震えた。第一、私が行きたかったのはネパールであり、どうしてこの釜が崎なのか。

1年ほど迷った。労働がきびしいから病気の人が多い。結核の人も多い。いまどきの日本にまだ結核があったのかという驚き。病気がうつったらどうするのと相談した人にも言われた。若い女性である自分が歳上の男性たちに何ができるのだろうか。男性社会で通用するのか。迷った。しかし、自分がネパールに行きたい気持ちも、助けを必要としている人のところへ行くということだった。何度も釜が崎をたずねて、医療従事者を必要としていることを実感し、少しずつなにかできるかもしれないと思って、決心した。数年ががんばってみよう。その後ネパールに行こうと。そしてそれから25年、ネパールには一度も行かず、釜が崎にずっといることになった。

釜が崎でのケースワーカーの活動であるが、正式には、サービスを提供して賃金を得るという意味での「仕事」ではなく、基本的に個人によるボランティア(無償)である。最初は組織に属していたが、途中からは、個人レベルでいろいろな人から支えてもらいなが

5) 入佐明美 [1997] 『地下足袋の詩：歩く生活相談室18年』(東方出版)を参照のこと。本稿は、この本に加え、入佐さんの講演(自殺防止センター、及び大阪経済大学)で聞いたお話から私がまとめた。内容における誤りは私の責任である。

ら、カンパ、講演料、本、貯金などで暮らしている⁶⁾。

やっていることは、釜が崎地区の中を歩き、皆に声をかけて、できることを探していくようなものである。最初は人間関係がなかったので、「寒いですね」「お元気ですか」などと声をかけても無視されるか、「こんなところで若い小娘が何してるんや」「小娘にわたしの気持ちがわかったたまるか」「大学生がレポート書きにきたんやろ。研究材料にするな」「警官やろ」「エエカッコするな」というように怒られたりすることがほとんどだった。「がんばってね」といっても「なにをがんばるんや」「仕事がないのにがんばってどうするんや」といわれるような日々だった。病院では看護師という地位があるから患者さんのほうから寄ってきてくれていたのだ、患者さんのほうが一步引いてくれていたのだ、と気づいた。やっぱりやっていけないと自信をなくす日々だった。

しかしあきらめずに言葉かけを繰り返していると、一過性の観察者ではないとわかってくれたのか、「がんばりや」「看護婦してたら給料あるのに、あほやな」と声をかけてもらえるようになってきた。「あのねーちゃん、看護婦らしいで」とうわさが広まり、徐々に「どうにかしたってーな」というような相談のようなものをもらえるようになっていった。病氣相談だけでなく、おいたちや身の上話なども聴かせてもらうようになっていった。きついことを言われたときにも、他の人が「しんぼうしたってや。みんないらいらした気持ちを持っていくところがないんや」といってフォローしてくれる人もいた。

とけつ
嗜血した人に声をかけてもほっといてくれといわれたこともある。いまさら元気になってもしゃーないというのだ。退院してももう働ける年齢でなく、仕事がないと路上生活するほかに「生き地獄」なので、死んだほうが楽だ、どうなってもいいからやけくそで酒でも飲んで死にたいというのだ。病氣が治っても喜んでくれる人もいないと。入佐さんは絶望感に襲われ、どうしたらいいかわからない（病院では、みんな早く病氣を治したいと思っているのが当然だった）。とにかく、一ヶ月話を聞き続けた。そのような中でようやく「病院連れて行ってくれるか」という言葉が出てくる。入院して見舞いに行ったときに、同室の人から「あの人は、ねえちゃんが話を聞いてくれたのが一番うれしかったって言うてたで」ときく。「ホンネで話せる人がおったら、人はなんとか生きていける」といってもらえる。そういう「仕事」「関わり」だ。

この釜が崎には、選択肢がない、「人生を選べなかった」人がたくさんいる。追いやられ、差別され、ここで日雇い労働者になるしかなかった。歳をとり病氣や怪我で仕事からもみはなされ、路上生活するしかなかった人がたくさんいる。簡単な解決はない。でも一人でも聴いてくれる人がいれば、また一人でも本音で話せる人がいれば、人は生きていけ

6) 組織を作ったり維持することにエネルギーを使いたくないから、個人で活動しているという。ひとつの大切な視点のような気がする。

る。それを信じて、目の高さをあわせて、話を聴いていき、できる範囲での援助をしていくのが入佐さんのしていることだ。関わる側が元気すぎると、しんどい人には重すぎることもある。派手な格好でも距離ができるだろう。入佐さんは運動靴、ズボンにジャンパー姿だ。相手が心を開ける距離や間のとり方、話し方、声の大きさはどのようなものか。それを探りながら活動している。

若くて元気なころ、最初は、それでも上から同情・要求のような面があった、と入佐さんは自分を振り返る。「この人たちを立ち直らせてあげたい」というような視点を持っていた。「こっちもこんなにがんばっているんだから、おじちゃんもがんばってよ」と心の中で思っていた。だからよくケンカしていた。「おじちゃんががんばってくれないから、関係が作れないのよ」と相手のせいにしていて。自分は高いところにいて、変わるべきは相手だと思っていたのだ。

しかし徐々に話せる関係になるなかで、多くの人が自分の人生を語ってくれた。九州で炭鉱夫であったこと、別れた家族や親のこと、会社が倒産してここに流れてきたこと、不景気になると真っ先に切られる存在であること、在日朝鮮人で差別されいじめら続けた人生であったこと、教育を受けられず字が書けないことなど……。それらを聞いて入佐さんは自分が変わっていったという。徐々に、よくそんなきびしい環境の中、がんばって生き抜いてこられましたね、本当にすごいですね、と頭が下がる思いになっていった。その人の人生に対して尊敬の気持ちを持てるようになっていった。

私が相手から学び、私が変わらねばならない。そうわかっていく過程だった(長い時間がかかった)。自分の自己実現欲のために、労働者の人たちを単なる対象として扱ってきたと気づいていった⁷⁾。そんなことを考えてばかりいて、無気力になったり、食べられなくなったり、寝られなくなるなど心身で苦しむことがあったが、「人の役に立つ」というのでなく、「まず私自身が、学ぶことからはじめよう」とおもうと楽になっていった。「人の役に立ちたい」と思っていたが、「してあげる」と思う人間だったのだとわかって、それを反省して自己改造をしていった。労働者の人たちがどのような気持ちで生きているのか、全身を傾けて聴いていきたいと思うようになっていった。

それはしんどいことであったが、それをしていくと関係が作れるようになっていった。相手から声をかけてもらえるようになり、親切にしてもらえるようになっていった。たこやきやジュースをおごってもらえるような関係になっていき、楽しくなっていった。ありのままを出したらいいんだとわかると、楽になっていった。病院に行くよう説得するのに苦勞していたのに、むこうから病院に行くといってもらえることが増えた。変わらねばならないのは、私だった。

現実の厳しさに、「私がやっていることは対症療法・もぐらたたきに過ぎず、根本解決

7) 入佐『^{じかたたび}地下足袋の詩』p 230-231あたりを参照のこと。

になっていないのでは。社会は何にも変わっていない。話を聴いてもしんどいだけだ」とむなしくなり、悩み、落ち込むことが何度もあった。しかし、たとえば次のようなことがあって、立ち直っていったという。

しんどそうにしていると、ある労働者のおちゃんが「元氣ないやん」と声をかけてきてくれた。そのころは肩の力がだいたい抜けていたので、彼にしんどい思いを全部話すと、話を肯定も否定もせず、「そうか、そうか」と集中して全身でうなづくように聴いてくれた。話をしているうちに楽になっていった。話し終わって、「ねーちゃんががんばってもカマ（釜が崎）はよーならへん。せやけど、声かけてくれるねーちゃんは、それだけでええねん。みんなそれが一番うれしい」といってくれた。こちらがありがたいというのと、「自分のようなもんでエエねんやったら、いつでもゆうてや」とニコニコしてくれた。彼もまた満足そうな顔をしていた。

そうした中で、私の役割というのが見えてきた。声をかけ、話を聴くことに徹底していけばいいんだとハラが座って、悩みが解決していった。小さなことで心こめてしよう、あの人がしてくれたように私も努力しようとおもった。こちらが一方的に関わるのではなく、お互いが聴き合える、助け合える関係の中で、相手が元氣になるんやなど教えられた。労働者からいただくと思えるようになった⁸⁾。

行き倒れの人たちが、父やおじいちゃんどぶる。父ももし出稼ぎに来ていたら、こうなっただろうと胸が痛む。何かいい方法はないか。住所がないと、大阪市のやり方では生活保護が降りない。そこで、なんとかアパートを借りて（最初の必要なお金は入佐さんが貸し、保証人にもなる）、生活保護をとって（その手続きにも付き添っていく）、生活を安定させることを一つの活動とした。これはうまくいくと喜んでもらえるし、健康にも本当によい。安心して寝られるということがなかった人、自由がなかった人に、安心と自由があるということがどれだけ大切か。岩村先生の言う「病気を治す」とは「生活を直すことだ」ということが本当にわかってきた。

そのとき、まず、相手の人の希望を徹底してゆっくりと聞いていく。4畳半がいいのか、3畳がいいのか、1階か2階か、トイレつきの部屋がいいか、共同トイレがいいか、駅からの距離などなど。そしてその希望にあった物件を手間ひまかけて探していく。名前で呼ばれず、十把一絡げで扱われてきた人々。その人たち、これまで自分の希望を聞いてもらったことがなかった人たちにとって、一人一人の違いを大切にされることが大事だと思うからだ。好みを言う喜び、選べる喜びを経験してほしいなあと考えてそうしている。そのために、入佐さんは事前に希望にあった物件をいっぱい探しておき、当日、その全部を見てもらって、この中のどれがいいですかと聞いていくという。アパートを借りるのを断られることも多いが、一緒に苦労する中でつながれるものがある。アパートが決まると後は

8) 最高の指導者とは、みな「これは自分たちが成し遂げたことなのだ」とおもえるようにする人だという言葉がある。入佐さんが目指すケースワーカーの仕事とは、そのようなものだという。

自由ですよと伝える。入佐さんは朝の一定時間に必ず事務所にいるので、何かあったらそこに連絡くださいという形で安心も持ってもらう。

アパートが決まり、生活が落ち着き、自主的な生活になっていき、安心してぐっすり寝ることができるようになると人は健康になる。また周りの人や離れていた肉親などとの人間関係を回復することで、いきいきとしてくる。何十年ぶりに家族に手紙を書く人も出てくる。過去につらいことがあるとも、今が幸せだと過去のこともいいように思えてくる。過去の事実は変えられないが、老後の生活を心地よくすることがとても大事と思うからこそ、入佐さんはアパートの取り組みを重視する。

そうした中で、200人以上の人と関わったが、みな、ちゃんと借りたお金は返してくれる⁹⁾。ある人は、「生活の安定もうれしいけれど、外で寝ているとき、服ボロボロなのに、こんなワシを信頼して金を貸してくれた。一緒に部屋探してくれた。いまやから言うけど、そうして信用されて一人前に扱こうでもらたことがいちばん嬉しかったんや。せやから借りたお金を返せてほっとした。姉ちゃんを裏切らへんで、ほっとした。姉ちゃん、ワシも最近、人間ってもんが信じられるようになってきた」といつてくれた。別の人も「小さいときから養護施設で育って苦勞してきた。今までの人生でこんなに人に大切にされたことなかった。ねえちゃん、おおきに」といつてくれた。「世間から見たら最低かも知れへんけど、わし、今が一番幸せや。心が落ち着いて生活できるの始めてや」という人もいた。

入佐さんは、こうした体験の中から、労働者が一番求めていたものは、こういうことやったんやなあとわかっていった。以前はあせって、生活保護や病気を治すことという現象にひきずられていたが、「こんなワシを信じてくれる人がいるんやなあ、こんなワシもかけがえのない人間なんやなあ」と思ってもらえる関係を作っていくのが一番大事なんやなあと教えられていった。

さらに、労働者の人たちと関わってわかってきたことは、頭だけでなく、体で自分がどう生きているかが大事なんやなあということだと、入佐さんは言う。自分にもだめなところ、弱いところ、自己嫌悪するところ、心の傷などがあるが、それでもかけがえのないものとして生かされていると思えて自分を肯定でき自己受容できたとき、他者の弱さを本当に優しく受け止められる。今の世の中、成績や仕事・収入・能率で評価されるばかりだが、まずは、存在していること自体が不思議で、存在しているだけでいとおしいと思えることが大事なのだ¹⁰⁾。「がんばらないと存在が認められない」というのが、人をしんどくさせている。存在しているだけでいいのに。死ぬ人をたくさん見てきたからこそ本当にそう思う。心の傷や弱さをどう受け止め癒していくかの答えはそこにある。そうした気づきを、「自己肯定は他己肯定に、自己受容は他己受容に比例する」、「人と向き合うことは、私自身と向き合うことなのだ」とまとめる¹¹⁾。またある医者 of 言葉「心の静かさが一番大

9) 馬鹿正直にやっていると、口コミで次々と人と出会ってこういう数字になっていったという。

10) 今、目の前にあるものの背景には、多くの人の努力や労働がある。それを想像して感謝する感覚。入佐さんはそうした感謝を忘れた生活をしているなあと反省する。

切」という言葉を大事にする。心の静かさが深い人に話を聴いてほしいと思う¹²⁾。

ネパールに行きたい気持ちは自然といつしか消えていったという。彼女は最後に友人の言葉で締めくくる。「あなたが若いころから行きたがっていたネパールだけど、あなたは釜崎でそのネパールに出会えつつあるんじゃないの」。わざわざネパールに行かなくとも、この目の前のことを大切にすればいい。「ネパール」は場所ではなかったのだと、彼女は今、言い切るのだ¹³⁾。

沁みてくる歌

スピリチュアルだと思う歌（歌手）を少し紹介しておく。無数にあるのだが、思いつくままに、いくつかだけ。（このシリーズですでに紹介したものを除く）

サンボマスター。「そのぬくもりに用がある」他。TVでインタビューとライブ風景を見て一発でほれ込んだ。彼らは露わだ。一見、^{あら}ダサイ、普通の丸っこい兄ちゃん（山口隆）が、魂をかけて叫び、むせぶ。まっすぐで、センスあって、ほんとに心をおち込んでいる。なんてかっこいいんだろう。むき出し性はブルーハーツ系。CDよりもライブだろう、彼らは。

^{ひととよう}一青窈。癒し、泣かせ系でメジャーになったし、軽い曲には合わないものもあるが、ライブでの「アリガト々」は、沁みた。“ありがとう”という言葉のすばらしさを伝える、歌と歌唱力。表面的なエエカッコシイじゃ、こうはならない。「ハナミズキ」は、ちゃんと失恋が終わりますようにという切なる願い。相手にも自分にも優しい。昔、彼女と別れた頃の切なさを思い出す。

元ちとせ。「ワダツミの木」「心神雷火」「ひかる・かいがら」他。スピリチュアルそのまま系。

^{ビギン}BEGIN。「^{しまんちゆ}島人ぬ宝」他。大切なものを、わかりやすく歌う、やさしい人たち。

平原綾香。「明日」「The voice」「BLESSING 祝福」など、いい歌を歌うときの感じは

- 11) 入佐さんは、労働者に「自分のことをあんじょうでけへん人は、他人のことも大切にでけへんで」と教えられた。「私たち、クリスチャンにとっては自分を犠牲にすることが本当の愛になります。」といったら、「あほか！ 何いうてるんや！ そんなことを言うさかい、偽善者といわれるんや」と怒られたという。そうして入佐さんは自分を大切にすることを実践していくようになっていく。
- 12) 入佐さんは、「人が墮落していくことは簡単だ。それはいい聞き手に出会わなかったからである。」というような言葉を紹介して、自己肯定にはいい聞き手が必要という。
- 13) このようなスピリチュアルな生き方をしている入佐さんに対し、何のためにやっているのかといぶかしがる人がいる。宗教に勧誘するためかとか、選挙に出るためかとか。スピリチュアルなものが見えない人がいるということだ。逆に聞きたい。あなたは何のために働いているの？

いい。

中島みゆき。言うまでもない大御所だし、多くのスピリチュアルな作品を持っているが、あえてあげるなら「誕生」と「二艘の舟」、「ファイト」、「命の別名」などが好み。油断させてくれる関係についての言及多し。

タイマグラばあちゃん

『タイマグラばあちゃん』（澄川嘉彦監督、2004年作品）の主人公「ばあちゃん」（向田マサヨさん）の生き方は、スピリチュアルというにふさわしい。岩手県の山奥、早池峰山の麓に「タイマグラ」と呼ばれる小さな開拓地がある。昔開拓で入植した人たちもその不便さと現金収入のなさから次々と山を降りていき、向田久米蔵・マサヨさん夫婦だけが、その人里離れた場所で住んできた。水道なし、電気なし、ガスなしで、湧き水・沢の水とランプ、薪の素朴な生活。畑でとったものを中心とした生活。味噌を自分で作り、ときには豆腐も一から作る。毎日毎日体を動かして生きている。神様（お農神さま）に収穫の感謝の言葉をいって畑仕事をしている。自然の中に住む生活。大雨にたたられると不作になる生活。冬は雪に埋まる生活。昭和63年（1988年）にようやく電気がひかれたが、日の出とともに起き、日が暮れると寝る生活なのでテレビもあまりみない。長年連れ添った久米蔵さんが1989年に92歳で亡くなってからも、曲がった腰で、一人でその生活を続ける。一人で畑をやっていくのはしんどい。草取りなどは重労働だ。80歳近い1921年生まれのマサヨばあちゃんにはきつい労働だが、それを当然のこととして生きてきた長い歴史がある。



毎日の生活を「極楽だあ」と笑って過ごしている。

1988年に大阪出身の若者、奥畑さんが隣の空き家に住み着き、結婚し、子どもも生まれた。20年ぶりのお隣さん。タイムグラバあちゃんの生活に少し彩いろどりが加わる。奥畑さんは、自然を大切にする向田夫婦の生き方からいろいろなものを学んでいく。2000年の春にはあちゃんが心臓発作で倒れた。病院での闘病生活のあと2002年暮れに亡くなったが、奥畑さんの家族が、ばあちゃんから教えてもらった手法で、味噌作りを引き継いでいく。

この映画は15年にわたる生活を写し撮っている。年老いたカラダでさまざまな労働をこなしていくところを見ていると胸が締め付けられる。監督の澄川嘉彦さんは、最初はNHKの取材記者としてばあちゃんに出会うが、途中で退社し、自分もタイムグラに住み着き、この映画を作った。不便で大変な生活。そこに写し撮られているものをスピリチュアルなものとは私はいふのだろう。

人の人へのかかわり方・再考：スクウェアとヒップ

先日、ある集まりで、東工大のA先生という人のひどい姿勢を見せてもらった。私たちが行った実験的ワークショップをこっぴどく批判をするのだが、その言い方がとても権威的でびっくりした。まさに“反面教師”だった。

ワークショップとは、「問い」を発するもので、答えを与える（一方的に教える、Q & A的に答えを提供する）ものではないはずだ。プロセス、そのなかでの感情などの変化を味わったり、一緒に考えていくものだろう。参加した者一人一人が、自分（の内面）や社会を振り返るものはずだろう。未完成の作品に対しても、一緒に作ってこうね、こうすればマイナス面・欠点は克服できるんじゃないかなというような、ともに解決を探っていくような共感的なかわりをもとうとするのが、「これまでの一方的な上からの教育への反省」としての、私の考えるワークショップ的な姿勢だ。

だがそのA先生はまったく笑えるほどに逆の姿勢だった。私たちを傷つける言葉をいくつも吐いていて、それでいてそのことに少しも気づいていない。だからあとで私たちの仲間の一人が近づいていって意見交換しようとした（わかりやすく言うと、仲直りしようとして歩み寄った）ときにも、「よく僕のところに顔を出せましたね。勇気ありますね」というような皮肉っぽいことをいう人だった。

「素人が」とバカにするような言い方、態度。自分はわかっているという教師的な態度。不十分性を見つけてそこを自分のもっている「あるべき姿」を基準に、上からの態度で、批判する。自分をぜんぜんワークショップの中で振り返らず、ワークショップの作り方が悪いという一方的な責任転嫁をする。自己を正当化して、こちらを攻撃するだけ。「問いを出してともに考えていく」という態度の真逆だった。私たちが提供した1人2役ロールプレイで、何を感じ取るか、感じ取れなかったのか、そこから何を導いたのか、を少しでも自分から見つけ出そうという前向きな姿勢を見せないで、こんなひどいものを出してと

怒っている。説教してくださる。不十分で欠点のあるワークでも、いいところを少しでも見い出そうとして勇気付けるものでなく攻撃していた。むしろ曲解して悪く取られ、不十分なところを拡大解釈され、攻撃されたとこちらが感じる様な態度であった。つまり先生的に外部に怒りをぶつけていた。そんなだから、この人に尊敬心をもつとか、「この人から学ぼう」という気になれない。「指摘してもらってありがたい」と思えない¹⁴⁾。

私たちの設計の不十分さはもちろんある。しかし100%悪いか。あのワークをする中で、気づきの一つもないのか。そんな人が、ワークショップを学ぼうという場にきていて、実践もしているというのだから驚く。こんな人が教師だなんて、といたいだが、まさに悪い意味で、教師的！

これは、学生の論文を、学者のようでない、私の期待する水準ではないと、上から減点法的に非難するような態度ではないか。しかし、不十分ながらも、その人が作り出したものの面白さ、努力、いいところ、未完成だが光っているところに焦点を当てるのが大事だと私は思う。面白がったり、学ぶことが大事だと。(入佐さんはそのような人だった。)学問的であることがそんなに大事かと思う。それってとてもスクウェアな態度だと思う¹⁵⁾。学問なんて役にたたねえ、ってほうが今、パワフルだと思う。

スクウェアだというのは、「安全」を過剰に言う姿勢にも感じる。安全でないというとホント悪いもののように聞こえる。だが「安全」を前に出すのはとてもいやらしい。

それに関するある例を一つ。ある理科の先生が宿題課題として家庭での実験をいろいろ考えてプリントでくばったら、「家でやらせるのなら、安全性は大丈夫でしょうね」と念押しされた。何かあった際に責任が問われますよ、と。そうした空気が日本中に広がっている。あれもだめ、これもだめ。結局、幼児でもできるように簡単で安全な実験だけの課題としたという。つまりつまらなくしたのだ。安全のために。そんなことでいいのだろうか。ぜんぜんヒップじゃないよね。

ワークショップも同じだろう。そもそも、管理的で工場のベルトコンベア式教育への反省から、自主性・創造性を重んじる教育改革として出てきたはずだ。^{あつれき} 軋轢やしんどさを体

14) 『発句経』に「粗なる／ことばをなすなかれ／言われたるもの／また なんじにかえさん／いかりに出づることばは／げに くるしみなり／しかえしかならず／汝の身にいたらん」という言葉がある。つまり、「もっと言い方があるだろうに。あーあ」ということ。攻撃的な言い方は、論争・論理では勝っても、動機付けにはまったく失敗する。逆効果である。この初歩を押さえていない人は多い。特に、男・勝ち組系のひと。

15) 1950年代にアメリカで人間のタイプわけに用いられた概念で、スクウェアとは「アメリカの夢を理想とし、住み心地のいい郊外の家で幸せな家庭生活を営み、庭には芝生と花。新型車に乗り、かなりの給料の会社に出かける。帰宅後はカクテルを楽しみ、美しい妻との間にはやがて二人の子どもが生まれる」というようなことを望む連中のこと。それに対し、それらのすべて逆のスタイルの連中をヒップという。独立精神が旺盛で、創造するのが好きで、カネよりも自由を愛し、人に使われるのが嫌いで会社にも勤めない。それなのにタフに生きている連中のことだ。森永博志 [1995] 『ドロップアウトのえらいひと』東京書籍、p 10-11より。

験したり、失敗したり、作っていく中で学ぶものというダイナミックな思想があったはずだ。

しかし、そのA先生が体現していたのは、そういう自らのスクウェア性を反省するものでなく、まさに、否定的な気持ちでの足引っ張り攻撃。チャレンジングなものをつくったので不十分なところは確かにあったが、これまでの枠の中だけでなく、一歩突っ込んで深めようとしたものだった。それにたいして、「安全性」「完成していない」という名で、全面否定。「よくこんなものを出してきたな」と。こんな足引っ張りされると、「もうこの人（たち）の前では発表しないでおこう」「非難されるぐらいなら無難なものにしよう」となる。結果、これまでのような、条件の整った、変数の少ない、予定調和な、入門的な、楽しい、フォローが十分できる、ノーリスクな完全なものとなる。つまらなくなる。

私の思う〈スピ・シン主義〉は、けっしてスクウェアなものにならないようにとおもって、「上層建築」批判、「闇の混沌のエネルギー重視」をつけている。ヒップな精神でのシングル単位感覚を忘れたくないねえ。